

コロナ禍で制限された読み聞かせが読み手と聞き手に与えた影響

有林沙央

読み聞かせは、子どもの興味、情緒、想像力、言語能力の発達を促す活動として、多くの場所以外から未就学児から学齢期の子どもまで幅広い年代を対象に実施されてきた。しかし、2020年初頭から世界中で新型コロナウイルスが流行し、学校や公共図書館でのお話し会で行われる読み聞かせは、発声を伴うことから制限を受けることとなった。このような状況下で様々な制限を受けることが読み聞かせの良さを損ない、運営の仕方や参加意欲に影響が出ているのではないかと考えた。

そこで、本研究では、お話し会での読み聞かせへの制限が読み手・聞き手に与えた影響を明らかにすることを目的として、量的な調査を行った。

コロナ禍でお話し会を運営した読み手と、お話し会に参加した聞き手の両方を対象に、Googleフォームを利用しオンラインでアンケートを行った。アンケート内容は、お話し会の状況やお話し会に参加した子どもの様子などをコロナ禍の前と後それぞれに対して質問するものである。

読み手に対する調査では、全都道府県の公共図書館や私立図書館から抽出された合計300館、保育所職員20名、ボランティア12名に調査協力を依頼し、332人の対象者から99件の有効な回答を得られ、有効回答率は29.8%であった。聞き手に対する調査では、0歳から6歳の子どもを持つ保護者を対象として、図書館や保育所・幼稚園などを通じて80人に対して協力を依頼し、5件の有効な回答を得られ、有効回答率は6.5%であった。聞き手については保護者に代理で回答をしてもらうこととした。

調査の結果、制限が課されることで、「子どもとの触れ合いの手段や他者との関わりを持つ」「子どもとの触れ合いの手段や他者との関わりを持つきっかけとなる」などの、特に読み手が従来感じていたお話し会の良さが損なわれている側面もあることが分かった。

一方で、お話し会に参加する子どもが喜んでいたり楽しみにしていることも明らかとなった、読み聞かせを聞くことで癒される、緊張感を低減し落ち着きをもたらす効果や退屈間を低減し楽しい気持ちを喚起する効果があるなどの、聞き手にとってのお話し会の良さはあまり損なわれていないことが分かった。

また、子どもが静かに聞いてくれるなどの別の良い点や、これまでのお話し会の改善点に気づけた、オンラインお話し会のアーカイブが保護者やボランティアのお手本になるなど、今後お話し会を続けていく際に参考にすべき内容も得られており、新型コロナウイルス流行による影響は、一概に悪いものであるとは言えないことも明らかになった。

本研究により、新型コロナウイルス流行により、制限を受けた読み聞かせが読み手と聞き手に与えた影響の一部が明らかとなり、今後のお話し会を考えるためのきっかけが得られたと言える。今後の課題として、特に聞き手への調査に関してサンプル数を増やし、更に網羅的な調査を行うことが挙げられる。

(指導教員 松村敦)